夢のあとさき

清久 志信

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢のあとさき

【Ｎコード】

Ｎ１３２３ＢＡ

【作者名】

清久　志信

【あらすじ】

舞台女優だったサクヤは、千秋楽の終幕後、舞台の奈落へと転落してしまう。

目が覚めた時には、何故か屋外。しかも緑豊かな自然の中だった。

その後、人買いに捕まりそうなところを、偶然通りかかった騎士に助けられるが――。

「聖女だろうが悪女だろうが、何だって演じてやろうじゃない」

迷いながらも前に進もうとする男前女優の　異世界トリップ恋愛活劇！

（この作品は、自サイトにも掲載しております）

Scene. 0　夢の終わり　―Awakening―

これは、何という名の悪夢なのだろうか――。

崩れ落ちる城壁。あちらこちらから上がる火の手。剣戟の音は、近いのに遠い。

腕の中にある温もりは少しずつ、けれど確実に薄れていっていた。何度名を呼んでも帰る言葉はなく、ただ優しい眼差しだけが私に向けられている。

「……嘘つきっ」

穏やかなヘイゼルの瞳に罵倒を投げつけても、失われていく熱はとどまりもしなかった。真っ白だった互いの着衣が、それに比例して赤黒く染まっていく。

血の気の失せた唇が、謝罪の言葉の形にわずかに動いた。それに応えるように、私は何度も首を振る。

謝られたくなんかなかった。謝らなくていいから、ただ……。

ただ、いつもと同じように、ずっと一緒に笑っていられればいいだけ。

私の望みなんて、そんな小さなものでしかなかったのに。

――ああ、私は『この人』を失うんだ。

望みもしない実感が、胸を貫く。

――今度こそ守ると誓ったのに。

為す術もなく、ただ己の無力さを呪うことしかできない。

彼の瞳がゆっくりと閉じ、全身から力が抜け落ちた。それでも微かに残る体温が、余計に悔しさを募らせる。

声の限りに叫んだ。
声にならない想いを込めて。
――お願いだから、いかないで……。

「……クヤ、サクヤ！」
慣れ親しんだ声に名を呼ばれ、ゆるゆると意識が覚醒した。光とともに視界に浮かび上がったのは、見覚えのない白い天井と薄い水色をしたカーテン。
そして、柔らかな茶色の髪を持った、心配顔の青年。
すいと何かが頬を撫でるのを不思議に思いつつ、言葉を発しようとして失敗した。
上手く声が出ない。まるで話し方を忘れてしまったみたいだった。
「サクヤ？」
「……ト、ウヤ？」
ようやく絞り出せたのは、自分でも驚くほど掠れた声だった。透明で綺麗だと褒められたことがあるのが、嘘のようにざらついた声だ。
そんな私を心配そうに覗き込んでいるのは、誰よりも私に近い存在――双子の兄の藤夜だった。
身を起こそうとすると、思いの外力が入らず、崩れるように傾いだ身体を藤夜が慌てて支えてくれた。
「バカ、無理すんなっ」
優しく叱る藤夜の声が、ひどく懐かしく感じる。こんな風に叱られるのはいつぶりだろうと思うと、少し切なくなった。
藤夜は私の寝ているベッドを起こし、楽な姿勢で話をできるようにしてくれる。それが終わると、ベッド脇に置いてあった椅子に腰かけ、確認するような問い掛けを寄越した。

「サクヤ、おまえ自分がどうなったのかわかってるか？」
「どう、なったって……」
記憶を、藤夜に話せるところまで辿っていく。
そして思い出したのは、千秋楽の日のことだった。
「楽日に、奈落に落ちた？」
「そうだ。そのまま二週間も意識が戻らないまま、眠り続けてたんだぞ？」
「え？　二、週間……？」
その時間の経過を聞いて、信じられなかった。そんなはずはないという思いが、頭の中を駆け巡っている。
「……夢でも、見てたのか？」
呆然としている私を、藤夜はひどく気遣わしげに見つめていた。
それに対して、私は首を傾げる。
藤夜は、どうしてそんなことを訊くのだろうか？
「夢……」
夢なら、多分見ていた。
けれど、あれは本当に夢だったのだろうか？
こんなにも――。
「鏡吾さんの、夢か？」
「キョウゴ？」
一瞬、誰のことを言われているのかがわからなくて戸惑う。が、すぐに思い至って、更なる痛みに苛まれた。
「サクヤ？」
「そっか。ここは、鏡吾のいない世界だ」
鏡吾は私にとって、この世界で一番大切だった人。
私の全てを理解してくれた人。
そして、私の『全て』だった人。

想うだけで、胸が苦しくなる。
私は、自らの目の前で、鏡吾を失った。

「サクヤ」
そっと藤夜が私の背に腕を回し、優しく抱き締めてくれた。いたわるように髪を撫でる手が、つらい記憶の中の人と重なる。
「バカサクヤ。こういう時は声殺して泣くもんじゃないんだよ」
藤夜に言われて、初めて自分が泣いていることに気付いた。
そして、何もかもを理解した瞬間、それまでとどめていた想いが堰を切って溢れ出す。
嗚咽は、やがて嘆きの叫びへと変わった。
（嘘つき、嘘つき、嘘つき……！）
胸中で詰り続けても、もうその言葉は届かない。
ここにはいない鏡吾には。
そして、どこにもいない、『あの人』にも――。
祈りなんて、何一つ聞き届けられてはくれなかった。

Scene. 1　夢の始まり　―　Another World　―［1］

ひときわ明るいスポットライトの下、純白の衣装を纏った歌姫が一人、清らかに澄んだ歌声を響かせている。その最後の旋律が優しく拡がり、周りを取り巻く闇に溶け込むように消えてゆく。

やがて、その消えゆくメロディーに、囁くようなピアノの調べが重なった。それと同時に、ゆるやかな闇の侵食が始まる。光が失われていくに従って、ピアノの音色が大きくなり、完全な闇になった後、今度はフェイドアウトしていった。

しばしの沈黙の後、割れんばかりの喝采と拍手が上がった。それを待っていたかのように、舞台全体を照らし出す光。拍手は更に大きくなった。

舞台の上手と下手から、次々に笑みを湛えた役者たちが姿を現し、整列して深々と頭を下げる。ますます激しくなる拍手が、舞台上の彼ら、彼女らを包み込む。

そして、鳴り止まぬ拍手の中、千秋楽の舞台は終幕を迎えた。

「ちょっと、スモーク止めてー！　これじゃバラシできないじゃない！」

「あー、今止めましたー！」

舞台袖に向かって叫ぶ舞台監督の声に、誰かが応えるのをどこか遠いことのように聞いていた。

私はただ、いつも舞台が終わったときに感じる達成感だとか解放感とは違う、奇妙な虚脱感の中にいた。

初めての大役を果たし終わったからじゃない。そうではなく、私は『約束』を守り通すことができたから。

だから、もう――。

そう思った瞬間、足元にあるはずの床がなくなった。
「え？」
落ちている、と気付いたのは、数秒後。
悲鳴を上げる暇すらなく、ただ私は重力に従うままだった。
長いのか短いのかわからない時間があったのは確かだ。突如、目の前が真っ白になった。
（ああ、私、死ぬのかな）
自らの危機的状況であるにもかかわらず、妙に冷静な自分がいた。ぼんやりとした思考は浮かぶが、対処する気がひとつも起きない。
（それもいいか。鏡吾のいないこの世界になんて、生きてたって意味がない）
投げやりな思いに満たされた私は、訪れるはずの痛みを待たずに意識を手放した。

チャプン、と柔らかな水音が聴覚を刺激する。
流れているというよりも、打ち寄せているような水の音。
また、チャプンと。
（……水？）
涌き上がる疑問とともに、意識も徐々に浮上した。
水など近くにあるはずがない。私は舞台上にいたのだから。
不思議に思いながら重い目蓋を開けると、視界に飛び込んできたのは、鮮やかな新緑とその隙間から零れる眩しい太陽の光。
一瞬、思考がフリーズ状態に陥った。
「……は？」
しばらく呆けたようにそれらを眺めた後、かろうじて出てきた言葉はそれだけだ。
がばっと勢いよく起き上がり、辺りを見回す。どこをどう見ても、そこは緑豊かな森でしかない。

けれど、その瞳に映った風景を、すぐには信じられなかった。
「私、舞台の上にいたよね！？」
誰にともなく確認をとる。けれど、当然と言っていいのか、答えてくれる人はいない。
けれど私は、間違いなく舞台上にいた。カーテンコールを終え、バラシが始まっていて、衣装のままでは仕事できないと思って楽屋に戻ろうとして――。
（落ちたんだ。『奈落』に……）
あの時、どうしてかはわからないけれど、奈落の入り口が開いていた。きっと、誰かが幕やバトンのスイッチと間違えて奈落の開閉ボタンを押してしまったのだろう。
エンディングでスモークが焚かれていたから足元が一切見えなくて、更に言うとかなりぼんやりとしていた所為もあって、私は気付かずに落ちてしまったのだ。
そこまで考え至って、今度は思い出したように自分の身体を確かめた。
手、足、背中、頭……。どこをみても、異常はない。それなりの高さから落ちたはずなのに、掠り傷一つ負っていない。打ちつけたような痛みもなければ、青痣や腫れもなかった。
「……どういうこと？」
普通なら、最低でも打ち身くらいはあるはずなのに。
そして、何より不可解なのは、
「それに、ここ、どこよ」
見渡す限りの大自然。樹々には新緑美しい若葉が茂り、その枝には軽やかな声でさえずる小鳥たちが遊ぶ。すぐ側には、信じられないくらい透き通った水を湛えている湖があり、さざ波がきらきらと乱反射していた。先ほど聞いた水音は、この湖のものだったのだろう。
まるでお伽話にでも出てきそうで、私の住んでいたコンクリートに囲まれている街とは大違いだ。

「まさか、ここが天国だとか？」
そう思えば、納得できるような気がする。
これほど美しい景色があるのもそうだし、死んでしまったならば身体に異常がなくてもおかしくないから。
「でも、足あるしなー」
『幽霊』に足がないなんて、誰が決めたのかもわからないようなことを律儀に信じてみたりする。
もちろんそれだけでなく、意識もはっきりしているし、身体に感じる感覚が今までに生活してきたものと何の違いもないのだ。私が生きていると自覚するのに十分な要因だと思えた。
とりあえず、周囲に何かないか探してみようと立ち上がったとき――。
カサリ、と落ち葉の踏み締められる音。
（あ、人がいるんだ。よかった）
そう安堵の息を零したのも束の間だった。
木陰から姿を現したのは、屈強な体格の数人の男たち。そして、そのいで立ちに私はまたも思考停止させてしまった。
「ほお。こんなところにいいモンが転がってんじゃねぇか」
「おぉ？　なかなかの上玉だなぁ、おい」
固まったままの私に構わず、男たちが側まで寄ってくる。
私を客観的に見ることができたなら、この時まさに「目が点になる」という表情を実践していただろう。
（すいません、あの、何かの撮影ですか？）
思わずそう訊きたくなったけれど、何とか堪えた。だけど、そう訊きたくなってしまうのも無理はない話だと思う。
何故なら、今目の前にいる男たちの格好が、アリエナイ。
頭には、揃いのバンダナ。何の獣かわからないけれど、毛皮でできたベスト。腰にはナイフが提げられて、まるでファンタジー系のゲームや物語に出てくる山賊みたいだ。
（集団コスプレ？　って、どうせやるなら、もうちょっとかっこい

いキャラをやればいいのに）
　呆然としながらもお節介なことを考えていると、その男たちの一人にぐいと腕を掴まれた。
「イタっ！」
「大人しくしてなよ、お嬢ちゃん。そうしたら、いいところに連れて行ってやるからよぉ」
　ニヤニヤと粘着質な笑みを浮かべて、値踏みするような視線を向けられる。それによって生じた生理的嫌悪感が、私に次の行動を起こさせた。
　右膝を太腿の高さまで持ち上げ、一気に踏み落とす。私の腕を掴んでいた男の、足の甲の上に。
　ちなみに私は、舞台上で履いていたハイヒールのままだ。
「うがぁっ！？」
　予想外に訪れた激痛により緩んだ男の手を振り払って、私は脱兎の如く走り出した。
「こんのガキっ！　待ちやがれっ！」
　待てと言われて素直に待つヤツなんているわけがない。私は男たちの声を完全無視して猛ダッシュした。
　走りながら履いていたハイヒールを脱ぐと、ついでに後ろに向かって投げつける。一つは外れたけれど、もう一つは男たちの一人の顔面に命中した。
　裸足になった所為で地面に落ちている小石や小枝が私の足を傷だらけにしたけれど、そんなことに構ってなどいられない。
　背後にはあの山賊みたいな男たちが、怒りに顔を朱に染めて追ってきているのだから。
　私はただひたすらに、少しでも前へと足を運んだ。
　けれど、数分走った頃、突然前方に人影が躍り出た。
（挟まれた！？）
　絶体絶命。四面楚歌。袋のネズミ。
　そんな言葉が、頭の中に幾つも浮かぶ。

（あと、こういう状況ってどういうんだっけ？　あ、あれだ）
人間とは、意外にも自分の危機に色んなことを考えることができるらしい。
（『まな板の上の鯉』。……ちょっと違うか）
いや、単に現実逃避しようとしているだけかもしれないけれど。
「大丈夫か！？」
「え？」
私を現実に引き戻したのは、目の前に現れた人物の思いもしない言葉だった。
よく見てみると、さっきの山賊系の男たちとはどう見ても違う系統の、けれどある意味同系統な姿。
白を基調に赤いラインの入った裾の長い上着。その下には黒のインナーを着ていて、ボトムは上着と同じ白。かっちりとした軍服のような格好で、腰には立派な剣を携えている。
騎士、という言葉がぴったりな気がした。
「おい？」
私が何も答えられないでいると、その人は訝しげな表情ですぐ傍までやってきた。と、それとほぼ同時に、
「見つけたぞ！　このガキ、ぶっ殺してやる！」
まさに血眼、と言わんばかり形相の男たちの声が響いた。特に私が足を踏みつけた男は、茹でダコのように真っ赤になっている。
死んでもいいと思っていたのは確かだけれど、こんな奴らに殺されるのだけは謹んで辞退させて頂きたかった。
「下がっていろ」
さっきの騎士――かどうかは定かではないけれど――が、鞘からすらりと剣を抜き、私を庇うように男たちの前に立つ。
逆上している男たちは、相手に構わず一斉に武器を構えて襲いかかった。
多勢に無勢。その人が危ないと思ったけれど、止める術もなくて、私は咄嗟に固く目を瞑った。

一瞬後、聞こえてきたのは幾つもの呻き声と人の倒れる音。
そっと目を開けると、先ほどより少し離れた場所に立つ騎士が、剣についた赤い滴を一振りして払い、鞘に納めているところだった。その周りには、山賊紛いの男たちが倒れ伏し、夥しいほどの赤が飛散している。
むっとむせ返るような、生臭い臭気が辺りに拡がった。
地面に拡がる赤が、未だに生々しさを残している私の記憶に、重なる。
（これは、何……？）
自ずとせり上がる嘔吐感。口元を押さえ、しゃがみ込んだ。
視界が、揺らぐ。
赤。紅。朱。
目の前に拡がる、アカ。
（これは、誰の……？）
目の前に、ありもしない光景が拡がる。
泥の混じった水溜りに、滲むように拡がっていく、アカ。
（これは……）
小刻みに震え出す、指先。肩。心。
『サクヤ』
懐かしい声は、もう聞けないのに。
『サクヤ』
それでもまだ、求めてしまう。
「……キョウ、ゴ……」
目蓋の裏に、愛しい笑顔。
――私は、再び闇に囚われた。
目が覚めたら、病院だった。

そんなオチなら良かったのに、現実は案外厳しいものらしい。
次に目覚めたのは、清潔そうな真っ白なシーツに包まれたベッドの上。
視線を巡らせれば、同じようなベッドがいくつか並んでいて、何となく病院のような雰囲気を醸し出している。けれど、その割に他の人がいる様子はなく、私が使っているベッド以外はすべて空いていた。
隣のベッドには助けてくれた騎士が腰掛け、少し気難しそうな表情で手にした書類を眺めている。傍らには他にも数枚の紙の束が置かれていたから、現在進行形で仕事中なのかもしれない。
「あ、目覚めたか」
私の観察するような視線に気づき、騎士は手の中の書類を束の上に戻した。表情は改められ、こちらを案じるような、申し訳なさそうな顔だった。
横になったままでは失礼な気がして、ゆっくりと身を起こす。
「無理しなくてもいいぞ」
「いえ、大丈夫です」
騎士が気遣いの言葉を寄越すけれど、実際にどこかを怪我したわけではなかったから、無理をしているつもりはなかった。少しだけ身体がふらついたけれど、それもそのうち治まるとわかっている。
「すまなかったな。普通はああいうのに免疫ないよな」
「……ありがとう、ございました」
申し訳なさそうに微笑む彼を見ないで、短く礼だけ返した。助けられたのは紛れもない事実だから。
けれど、本当に助けてもらえたことが幸運だったのか、いまだに判断できずにいた。
もしかしたら、あそこであのまま殺されていた方が、私は幸せだったのかもしれない。あの瞬間は死にたくないと思ったけれど、危険が通り過ぎれば「やっぱり」と簡単に考えを変えてしまえるなんて、何と自分勝手なんだろうと思う。

ただ、少しだけ気になることがあった。
それだけは、どうしても確かめられずにはいられない。
「一つ、訊いていいですか？」
「何だ？」
「ここは、どこですか？」
「ああ、安心していい。帝都の宮城内にある医務室だ」
「テイト？」
聞き慣れない言葉だった。思わず疑問の表情を浮かべた私に、騎士も訝しげに眉を顰める。
「サンベルティって言ったらわかるか？」
騎士自身はわかりやすく言い変えたのだろうけど、私にとってはますます知らない言葉だ。何となく地名のような気はするけれど、聞いたことは一度もない。
私は何も言葉を返せぬまま、もう一度まじまじと目の前の騎士の姿を観察した。
赤毛の髪に、ヘイゼルの瞳。顔立ちは彫りが深くて、欧州人かそのハーフの人っぽい。どう見ても日本人ではないだろう。
思い返せば、あの山賊のような男たちの中にも金髪や銀髪など日本人には有り得ないような髪色を持った者がいた。染めている可能性だってあるだろうけれど、それにしては自然な色に見えたのだ。
だったら、考えられる可能性は一つ。
ここは、『日本ではない』ということ。
「おまえ、どこから来たんだ？」
ただ見つめるばかりだった私に、騎士は警戒するような鋭い視線を向ける。
私は問われるまま、呆然とした思いで呟いた。
「『日本』」
「『ニホン』？」
今度は騎士の方がわからないといった表情をする番だった。
その顔を見ながら、私の中に限りなく確信に近い考えが浮かぶ。

大元を辿れば、劇場にいたはずの私が屋外にいたことからしておかしいのだ。私自身も、まず真っ先に驚いたことがそれだった。
そして、思ったのだ。
「もしかして、天国？」と。
もちろん、天国なわけがない。まず何より、私は自分が死んでも天国に行けるとは思えないから。
けれど、明らかに『日本』でもない。いや、私の知っているどの国でもないんじゃないだろうか。
「どうしてあの森にいたんだ？」
「知らない。気づいたら、あそこにいて……」
更に重ねられた騎士の問いに答える声が、次第に掠れていった。
どうしてなんて、こっちが訊きたいくらいだ。
私は、舞台の上にいた。日本の、とある小劇場の、その舞台上に。
それがどうして気づいたら全く知らない場所なのか。
（こんなの、物語の中だけじゃないの？）
そう、私が今までに読んだお話の中にはいくつもあった。
ウサギを追いかけていて知らない世界に迷い込んだ女の子の話。
古びた本を開いたら本の中の世界に吸いこまれた女の子の話。
ある日突然、知らない男の人が迎えに来て、奇妙な世界に連れて行かれた女の子の話。
でもそれはあくまでも『物語』であって、現実には起こり得ないはずだった。
けれど、ここは、私がいた世界とは違う。
目の前の騎士も、あの山賊のような男たちの姿も、それなら全て説明がつく。ここが違う世界ならば、コスプレなんかじゃなくて彼らの方が普通なのだ。
むしろ、異質なのは私の方で――。
そこまで思い至って、あることに私は気づいた。
気づいて、しまった。
途端に、どうしようもなく笑いがこみ上げてくる。

「……ふ、ふふふ……あはははは……」
いきなり笑い出した私に、騎士が怪訝な視線を向ける。それでも私は笑い続けた。
何て馬鹿馬鹿しい喜劇だろうか。これは、私の『望み』が叶えられただけ。
『鏡吾のいないこの世界になんて、生きてたって意味がない』
奈落へと落下しながら、そう思ったのは、間違いなく私自身だった。
けれど、
「どっちにしろ、いないじゃない……」
笑い声が、いびつに歪んだ。
『日本』にいたって、鏡吾はいない。
けれど、今いるこの世界にだって、鏡吾がいるはずないのだ。
どこに行ったって、鏡吾はもういない。
それは、不愉快なほど確かな事実。
「おい」
項垂れる私の肩を掴み、覗き込むように騎士が窺う。
けれど、私には目の前の騎士の顔など見えていなかった。何も、見えなかった。
「ここにだって、鏡吾はいない……」
声に出して呟けば、その言葉が刃となって自分自身を貫く。
どうしようもない、覆せない現実を前に、私にできることなんてもう何一つなかった。
「……馬鹿みたい。大人しく、死んでればよかったのに」
あの、奈落に落ちたその時に。
もしくは、あの男たちに捕まって、そのままに。
きっとそれが一番楽だった。
「おまえ、それはどういう意味だ？」
肩を掴んでいた騎士の手の力が、強くなる。その声音にも、強い非難の色があった。

何が気に障ったのか、彼は怒っているようだったけれど、そんなことは私にとってはどうでもいい。訊かれるままに淡々と答えた。
「そのままじゃない。あのままアイツらに殺されてればよかったのよ。鏡吾との『約束』だって私は守り切った。だったら、もう生きてたって何の意味も――」
乾いた音と頬に走る痛みに邪魔をされ、その先を言い切ることはできなかった。
殴られたのだと気づいたのはその数秒後。
「ふざけんな。何があったかは知らねぇけど、死にたくなくても死んでくヤツは山ほどいるんだ。死ねば良かったなんて簡単に口にするな」
激しい口調ではないけれど、騎士のその言葉には明らかな怒りと責める響きがあった。
彼の言っていることは正論だと思う。
けれど、私はその言い草に理不尽さを感じた。顔を上げ、キッと彼を睨みつける。
「じゃあ、アンタはどうなの？　あの男たちを簡単に殺したじゃない」
私の言葉に、騎士の表情が凍りつく。
「確かにアイツらは私を攫って売り飛ばそうとしてた。それがこの国で罪になるのかどうか知らないけど、もし罪になったとしても殺していい理由になるの？　罪を犯した人間は、殺されて当然なの？　だったら……！」
そこまで言って、泣きながら私を罵った人の顔が思い浮かぶ。
きっと、私と変わらない、いや、私以上に鏡吾を愛していた人の泣き叫ぶ顔。
『人殺し！　貴女がいなければ、鏡吾は死なずに済んだのよ！』
その言葉に、私は何一つ反論できなかった。
鏡吾が、私を庇ったが為に命を落としたことは本当だから。
私が、鏡吾を殺したのだ。

「だったら、私こそ殺すべきじゃないっ」
涙が、堪え切れずに零れ落ちた。今までずっと我慢してきたのに。
そして、涙とともにとめどなく流れ出てくるのは、後悔の念。
何故あの時、私は鏡吾を守ることができなかったのか。
何故あの日、二人で出掛けるのをやめなかったのか。
何故……。
そんな、今更どうしようもない思いばかりが、溢れ返る。
潤んだ視界で、騎士がどんな顔をしているのかはわからなかったけれど、何かが動いたのは見えた。
その直後、ふわりと優しい腕が背中にまわされる。そのまま抱き寄せられ、武骨な手が慰めるように頭を撫でた。
「そんなに、自分を責めるな」
まるで何があったのかをすべて見通しているかのような、慈しみに満ちた声だった。先ほど私を叱りつけたような厳しさはそこにはない。ただただ、どこまでも穏やかで慈愛を感じる声。
それに触発されるように、抑え切れなくなった嗚咽が零れる。
そう。私はずっと、許されたかったのだ。
鏡吾の家族でも、劇団の仲間でもなく、私は『私自身』から許されたかった。
誰よりも、『私』が『私』を許せなかったから。
けれど、何故かこの騎士の声で、私を絡め取っていた自責の鎖がするりと外れてしまった。理由などわからないけれど、「もう我慢しなくていい」とそう言ってもらえた気がした。
そうして私は、しばらくそのまま彼の腕の中で泣き続けたのだった。

ひとしきり泣いた後、私が落ち着いたのを見計らって、騎士は私を抱き締める腕をそっと解いた。そして、涙の痕の残る左頬に指先

で触れる。
「悪かったな、殴ったりして」
返す言葉もなく、私はただ無言で首を振った。
殴られたのは確かだけど、その後にかなりひどい暴言を吐いた気がする。この人は私を助ける為に剣を振るっただけなのに、あんな風に詰るのは筋違いだし、ただの八つ当たりでしかないと今更ながらに思った。
「でも、死んだって何にもならないだろ。それどころか、二度とおまえの大切な人に会えなくなるだけだ」
「……どういう意味？」
騎士の言う言葉の意味が、よく理解できなかった。
大切な人になら、どのみちもう二度と会えない。鏡吾に会えるとしたら、それは私が死んだ時だろう。
いや、たとえ死んだとしても、死後の世界が天国と地獄のように分かれているならば、会えない可能性のほうがずっと高い。多分、私は鏡吾と同じ場所には行けないから。
「ああ、この国の者じゃないなら知らないか。聖典には《自らを滅する者、彷徨し、辿り着くは『無』なり》って言葉がある」
聖典ということは、この国の宗教の教えの一つだろう。目の前の騎士が聖典などというものを引っ張り出してくるとは思いもしなかったが、見かけによらず信心深いらしい。
言葉の意味は、何となくわかる。わかるけれど、理解できるわけではなかった。
「そんな風に、自分から死を呼び込むようなことをしたら、おまえは生まれ変われない」
真剣な表情で、騎士が訴える。
けれど、私は生まれ変わりなんて信じてない。神様なんているわけないし、願いを聞き入れてくれたことだってないじゃないかと思う。
そんな冷めた考えが頭の中を占めていた。

「それほど大切な相手なら、生まれ変わったそいつともう一度一緒になりたいだろう？」
なおも真摯に投げかけられる騎士の言葉。そして、その瞳を見た瞬間、思わず息を呑んだ。
赤みを帯びた、薄褐色の瞳。
強く、まっすぐで、曇りのないそれに、不思議な引力があるかのように惹きつけられる。
「ずっと一緒にいたいくらい、そいつのことを好きなんだろう？」
重ねて確かめるような声は、脳に直接届くように身体に染み込んでくる。
気付けば、その瞳と声に促されて、私はこくりと小さく頷いていた。
たとえ神を信じていなくても、鏡吾と一緒にいたい気持ちは本当だ。純粋に、一途に、私は鏡吾とともに生きていきたいと望んできたのだ。
神も生まれ変わりも何一つ信じてはいないけれど、何故か信じてみてもいいんじゃないかという気持ちにさせられてしまっていた。
「だったら、生きろ」
駄目押しのようにそう告げる声に、私はもう一度頷く。それを見て、騎士は満足そうにニッと笑った。
「名前、聞いてなかったな。俺はキース。一応この国の騎士だ。おまえは？」
「サクヤ」
「サクヤ、か。変わった名前だな」
キースに言われて、つい苦笑を洩らしてしまった。日本でもあまりありふれた名前ではないけれど、やっぱりこちらでも珍しいらしい。
「よく言われる」
「でも、響きは綺麗だ。おまえによく似合ってるよ」
屈託なくキースが笑う。ほんの少し前まで厳しい表情をしていた

のが嘘のような優しい笑顔に、自然と私までホッとさせられた。

Scene. 1　夢の始まり　―　Another World　―［2］

「じゃあサクヤ、悪いけど歩けるか？　詳しい話を聞きたいんだが、ここじゃあちょっとな」

そう言って室内を見回しながら、キースが私に手を差し伸べてくれる。

もう吐き気や眩暈なんかはなかったけれど、素直にキースに掴まってベッドを下りた。床に足を付けると、裸足で森を走った所為か鈍い痛みが伝わる。傷の処置はしてあるようだったけれど、掴まっていないと歩くのも少々しんどい。それを見越した上で、キースは手を貸してくれたのだと遅まきながら気付いた。

足元には布製の靴が置かれていて、勧められるままにそれを履いて歩き出す。靴の中には柔らかな布でできた厚めの中敷きが敷かれていたので、少しだけ歩く時の痛みが緩和された。

医務室を出ると、広い石造りの回廊だった。ピカピカに磨き上げられた床石にキースの靴音が響く。

通り過ぎる人はキースと同じような服装をしていたり、お揃いの濃紺のドレスを着た女の人が多かった。そして誰もがキースの姿に気づくと脚を止め、頭を下げる。

そういえば、キースは『キュウジョウ』という言葉を口にしていた。聞いた瞬間『球場』という漢字変換をしてしまったけれど、どう考えてもそんなわけがない。周りの様子を見て、ようやく『宮城』、つまりはお城の中にいるのだと理解できた。

「どこまで行くの？」

「そんなに遠くはないさ。俺の執務室までだから」

執務室、ということは、キースの仕事部屋だろう。

色んな人から頭を下げられたり、宮城内に専用の部屋まであるのだから、もしかしたらキースは結構地位の高い人なのかもしれない。そういえば、右肩辺りに揺れている勲章のようなものもかなり立派

なものに見えた。
そんなことを思いながら、廊下をゆっくりと歩くこと数分。重厚な造りの扉の前に辿り着く。
キースは躊躇うことなくその扉を開け、中に私を促す。部屋の中央に置かれたソファーに私を座らせると、少しだけ待っててくれと言い置いて、部屋を出ていった。
本当に大した時間も待たずに戻ってくると、キースは私の向かい側のソファーに腰掛ける。
「率直に訊くけど、サクヤはベルティリアの民じゃないんだよな？」
「あの、それ以前の問題なんだけど……」
キースの確認に、私はおずおずと口を開いた。
信じてもらえないかもしれない。というか、正確には私が一番信じられないと思っている。
けれど、今の状況を説明するには、ありのままを話すしかないのだ。
「それ以前の問題って？」
「私は、この世界の人間じゃない、と思う」
言い切ってしまえるほど確実な証拠はなくて、「と思う」の部分を付け加えてしまった。
ただ、証拠はないけれど、十中八九間違いのないことだと確信はしている。
「この世界の人間じゃないって……」
「私の住んでいたのは、地球という星で、ユーラシア大陸の傍らにある小さな『日本』って呼ばれてる島国。小さいけれど、世界的にはそれなりに知名度のある国のはずなの。でもキースは知らないんでしょ？　そして、それと同じように私は『ベルティリア』なんて国、聞いたことがない」
できるだけわかりやすいようにと、少々くどいくらいの説明をした。
それを聞いて、キースは眉間に皺を寄せ、考え込むような素振り

だ。
「私も、今のこの状況は信じられない。でも、さっきも少し話したけど、あの森で気がつく前には、私は『日本』にある劇場の舞台の上にいたの。だから、どうしてここに来たのかも全くわからない」
「けど、言葉」
「え？」
「言葉は、通じるんだな」
キースの言葉に、驚きのあまり言葉を失った。
よく考えなくても、キースと不自由なく会話が通じているのだ。それにキースだけでなく、あの山賊のような男たちの話している言葉だってちゃんと理解できた。
「……ホントだ。全然それに気付いてなかった」
突拍子もないことの連続だった所為か、自分で思うより冷静になり切れてなかったのか。
多分、両方だとは思うけど、真っ先に疑問に思っていい部分だったことに気付けなかった。
とはいえ、言葉が通じることは私にとっては好都合だ。
こんな得体の知れない場所で、言葉も通じなかったら、途方に暮れるどころの話ではない。
「まあそれは置いといて、これからどうするつもりだ？」
「どうするって……」
どうすればいいんだろうと、改めて考えてみる。
けれど、考えたところで答えは簡単に出そうになかった。
何故なら、私には何もないのだ。お金も、地位も、人脈も。そして、何かをしようという気力自体も、あまりないかもしれない。
「とりあえず、サクヤが元の世界に帰れるまでは俺のところにいればいいけど」
「え？」
思わず訊き返すと、キースは安心させるかのように私の頭を撫でた。

「そんなに驚かなくてもいいだろう。サクヤからしたらこっちは得体の知れない世界なんだろうし、それを放り出すような真似はしないって」
キースの思いやりは本当にありがたい。
けれど、私が訊き返したのは、面倒を看てくれることに驚いたからではなかった。
キースは、「元の世界に帰れるまで」と言った。
私の頭には、「元の世界に帰る」という選択肢が全く浮かんでいなかったのだ。
「あの、私って帰れるの？」
「そりゃあ、来ることができたんだから、帰ることもできるのが普通じゃないのか？　それに、サクヤだって帰りたいだろう？」
当たり前のように言うキースに、私は素直に頷けなかった。
帰れるかどうかはわからない。まず、どうやって来たのかがわからないわけだし。
それに、もし帰れたとしても――。
（鏡吾は、もういないんだ……）
再認識する想いに、ほんのひととき忘れていた痛みがぶり返す。
たとえ帰ることができたとしても、欲しい笑顔は、望んだ居場所は、もうないのだと今更ながらに打ちのめされる。
「サクヤ？」
黙り込んでしまった私に、気遣うようなキースの呼び掛け。
けれど、私は応えることができなかった。
代わりのように、固い扉をノックする音が響く。誰かが、この部屋を訪ねてきたようだった。
音に反応して、キースがソファーから立ち上がり、扉に向かう。そのまま扉越しに幾つかやりとりを交わした後、自ら扉を開けて外にいる人物を招き入れた。
が、何気なく目を向けたその人物の姿を見て、思わず逃げ腰になってしまった。

「サクヤ、こいつは俺の同僚のアルゼだ……って、どうしたんだ？」
普通にその人物の紹介をし始めたキースが、遅ればせながらソファーで固まっている私に気付いた。
（っていうか、『人物』？）
私が逃げ腰になるのも、多分仕方ない、はずだ。
何故かというと、『アルゼ』と紹介された目の前の存在は、どこからどう見ても人間の顔ではなかったのだ。あ、いや、失礼な意味じゃなく、本当にそのままの意味で。
犬、というよりもむしろ狼だろうか？　獣面人身というやつだ。
今までの出来事もたいがいファンタジーだけど、ちょっとこれには度肝を抜かれる。
できれば、頭の後ろ側にファスナーでもあって、「ちょっと悪ふざけが過ぎました」とかって外してくれたりしないだろうか。
「サクヤ？」
「キース、彼女は私を怖がっているのではないか？」
「うそ、喋った……」
失礼極まりない台詞を押し止めることができなかった。キースはともかく、アルゼまで流暢な日本語を話しているんだから、その驚きは半端じゃない。
「もしかして、サクヤはラン族見るの初めてか？」
「……ラン族って何？」
もしかして、こちらの世界ではこういう獣系の種族が当たり前のようにいるんだろうか？　もしそうなら、少し外に出るのが怖い気がする。ゲームの中ならそんなに違和感ないのに、リアルに目の前にいられると挙動不審になるもんなんだと変なことを実感させられてしまった。
「私のような外見を持つ種族ですよ」
私の問いに、アルゼ自身が答えてくれる。見た目と違って、その言葉使いや声音は穏やかで紳士的な印象を受けた。
その声を聞いて、私はソファーから慌てて立ち上がった。

「あの、ごめんなさい、失礼なこと言ってしまって。その、私の住んでいたところには、アルゼさんのような種族はいないので……」
ファンタジー過ぎる状況に置いてきぼりをくらいそうだったけれど、何とか謝罪だけはきちんとできたと思う。でないと、初対面なのに失礼どころの話じゃない。
「あ、そうなのか。それは俺も予想外だったな。悪い」
キースの謝罪に、私は首を振って答える。
一方アルゼには気分を害した様子はなかったけれど、不思議そうに首を傾げていた。表情はよくわからないが、仕草は人間と変わらないように思える。
「失礼ですが、サクヤ殿はどちらから？」
「えっと、その……」
「それもあっておまえ呼んだんだよ。まさか、こんなにとんでもないところから来たとは思わなかったけどな」
「どういうことだ？」
更に疑問を深めるアルゼに、キースは「まあ座れよ」と先ほどまで自分が座っていた側のソファーを勧める。そして私にも座るように促しながら、私の隣に腰を落ち着けた。
「サクヤは、ベルティリアの民じゃない」
「ならば、どこの国だ？　まさか、シーチェンやグランディアを越えてきたわけではあるまい」
「『ニホン』って国から来たんだそうだ」
「『ニホン』？　聞いたことがないな」
「そりゃそうだ。この世界には存在しないんだから」
キースの最後の一言で、アルゼの動きがピタリと止まった。それからゆっくりと私へ視線が向けられる。その表情からは何を考えているのかが読みにくいから、余計に怖い。
「では、『異世界』から来たと、そういうわけですか？」
「はい、その通りです」
アルゼの視線にやはり少しびくつきながらも、私はきっぱりと言

い切った。
　さっきまではまだ不確定要素が残っていたけれど、アルゼの登場で異世界にいることは確実になったからだ。
「まさか、『アマビト』が本当に存在するとは……」
「『アマビト』？」
「何ですか、それ」
　呆然と――表情じゃなくて、声だけで判断したけれど――呟くアルゼに、私とキースがほぼ同時に訊き返した。アルゼは深く頷き、
「異世界からこの世界に遣わされた者のことをそう言うのです。しかしそれは伝承だけで、実際は異国から来た者のことだと私は思っていたのですが」
　そう説明しながら、物珍しいのかしげしげと私を見つめる。
　しかし、そんなにじっくり見られても、私自身は特に変わったところもないと思っているから居心地悪いことこの上ない。
「へえ、そんな伝承があったんだ」
「……ということは、おまえは真面目に帝国史の授業を受けていなかったんだな？」
「昔のことは気にするなよ。で、その『アマビト』ってのは、何の為に現れるんだ？　何の意味もなく出現するわけじゃないんだろう？」
　どうやら学生時代のキースは不真面目だったらしく、それを咎めるようなアルゼの質問だったが、キースはあっさりとスルーする。
　アルゼは少し呆れたような溜め息を零したが、どうやら今さら言っても仕方がないと思ったのだろう。キースに促されるまま、口を開いた。
「『アマビト』は時代の分かれ目に現れるらしい。不思議な力を持ち、国の行く末の鍵を握るとも言われている」
「不思議な力って、どんな？」
「伝承では色々あるが、一般的に奇跡と言われる現象が多いな」
「奇跡、ねぇ」

アルゼの説明に半信半疑な表情で、キースが私に視線を寄越す。
そんな視線を向けられても、私の方がキース以上にアルゼの話を信じられないんだと主張したい気分だった。
私には、不思議な力なんてない。今までの人生で、一度だって不思議な経験をしたことなんかなかった。劇場にはよく怪談じみた話が伝わっていたりしたけれど、実際に私がそういうものに遭遇したことだってない。肝試しに行ったときだって、誰かがいるだのいないだの騒いでいる中、私はまったくそういうものに気づかなくて、霊感の強い友達には「サクヤは鈍すぎる」なんて言われたことすらあるのだ。
それとも、この世界に来たことで、何か不思議な力でも備わったのだろうか？
確認するように自分の両手を見つめてみたけれど、いつもと変わらないし、どこをどう見てもごく普通だった。
「奇跡って言うからには、それだけすごいことやってのけたわけか？」
「私が知っている限りでは、雨を降らせたり、嵐を呼んだりしたというのがあるな。あと、流石にこれは噂に尾ひれがついたものだと思うが、人を生き返らせたなんてものまである」
「それは嘘だろ。ありえねぇだろ」
私を置いて話し続けるアルゼとキース。
アルゼは『アマビト』が起こしたといわれている奇跡の例を淡々と挙げ、キースはいかにも胡散臭そうに眉を顰めている。
その会話を聞いていて、私の胸に憤りが湧きあがってきた。
（『人を生き返らせた』？）
そんな力があるのなら、今すぐにその在り処を教えて欲しいくらいだ。
けれど、あるわけがない。
そんな力があるなら――。
「……とっくの昔に使ってるわよ」

突然発した私の唸るような低い声に、二人が驚いたようにこちらを振り向いた。
その視線で、私は自分が無意識に何を言ったのかに気づかされる。
事情を知らないアルゼはともかく、キースは私が何に対して苛立ったのかがわかったようだった。彼の表情が、気遣わしげなものへと変わる。
「……ごめん、何でもない」
目の前の二人に怒りを吐き出してみても、何も変わらない。
人の噂なんて、いつだっていい加減で、信憑性も薄くて、本人の気持ちにお構いなしに一人歩きするものだということは、嫌というほど知っているから。
けれど、わかってはいても怒りはなおも生まれ続け、私の中に燻ってしまう。
「それで、サクヤ殿はこれからどうするつもりですか？」
その場の空気を変えるように、アルゼが穏やかな声音で私に質問を寄越した。
私も気持ちを切り替えようと顔を上げたが、肝心の質問に対する答えが出て来ない。
「あの、えーっと、どうすればいいんでしょう？」
「さっきも言ったけど、しばらくは俺の家にいればいいさ。他に行く当てもないだろうし」
質問に質問で返した私に、キースが当たり前のように答えた。
確かにキースの言うとおり、行く当てなんてないけれど、こんな得体の知れない人間がお邪魔してもいいものなんだろうか？
そんなことを考えていたら、アルゼまでもがあっさりとそれに同意する。
「そうだな。それが一番安全だろうし」
「安全って、ここはそんなに治安の悪い場所なんですか？」
「悪いわけじゃないが、良いわけでもないな。それに、今の情勢が情勢だし」

「今の情勢って？」
何だか含みのある言い方をするキースに、私は更に疑問を重ねる。
キースはアルゼと一瞬顔を見合わせ、少し渋るような表情を見せた。それでも、黙っていても仕方ないと判断したのか、ゆっくりと口を開く。
「ちょっと、ごたついててな。最近はあちこちで反乱分子が活動してるんだ」
「そうは言っても、ほとんどは僻地で行われるので、帝都内は比較的安全なのですが」
つまり、テロ活動みたいなことが頻繁に行われている、ということのようだ。
あまりにも今までの自分には縁のないことで、想像が追いつかない。
ニュースなんかで他国のテロだとか暴動だとかの映像は見たことあるけれど、多分、この世界のそれとはまた違うだろうということしか思いつかなかった。
けれど、たった一つだけ、確実にわかる。
それは、簡単に人が死んでしまうということ。
キースもアルゼも騎士だ。騎士ということはすなわち『軍人』ということ。常に『死』と隣り合わせの生活を送り、時には自らの手で命を刈り取らなければならない職業だ。
『死にたくなくても死んでくヤツは山ほどいるんだ。死ねば良かったなんて簡単に口にするな』
キースが厳しい口調でそう言った理由がよくわかった。
たくさん、亡くしてきたのだろう。
部下、同僚、上司。もしかしたら、親しい友人や家族までも。
その積み重なってきた辛さは、私なんかでは計り知れないと思う。
「そんな顔すんなよ。おまえ一人くらい、俺がちゃんと守ってやるから」
私が反乱に対して恐怖を抱いていると勘違いしたのか、キースが

お気楽とも言えるような口調とともに私の頭を撫でる。
あまりにも軽い言い方に少しばかり呆れてしまうけれど、その反面キースの芯の強さも感じた。
多くの死を目の当たりにしながら、この人には荒んだ部分が見受けられない。それどころか、彼の笑顔には人を安心させるものがある。
怯えていたわけではないけれど、ホッとしたのは事実だった。
「で、住む場所はいいとして、帰る方法だな。それはおまえに任せた」
「私に全部押しつける気か？」
「俺よりアルゼの方が歴史にも詳しいだろうが」
「調べるのは構わないが、私にも限界はあるぞ」
キースとアルゼはもともと仲がいいのだろう。二人の会話はいい意味での馴れ合いが見えて、微笑ましくすらあった。
けれど私は、再びアルゼが来る前の話題に戻ったことがあまり喜ばしくなくて、話に加われなかった。
帰るべきなのはわかっている。私はこの世界の住人じゃないのだから。
けれど、帰ればまた鏡吾のいない世界を実感しなければいけないのかと思うと、やっぱり逃げ出したくなるのだ。
「限界があるって？」
「『アマビト』は記録自体が少ない上に、極秘事項が多いからな。書庫にある史料からわかることは限られているだろう」
「禁書扱い、か」
「そうだ。『アマビト』として限らないのならば、転移の魔術の応用的なものがあるかもしれないが……」
「転移は高位魔術だろう。そんなの出来るヤツはあのグランディアでも数えるほどしかいないんじゃないのか？」
「その通りだが、最終的な手段としては考慮に入れておくべきだろう」

真剣に話し合う二人の表情が、険しくなっていく。
言葉で言うほど簡単に、私が帰れるわけではないのだろう。
けれど、それが今は救いにすら思えた。
「いいよ、キース」
「サクヤ？」
「そんなに一生懸命にならなくてもいいよ。私、帰れなくてもいいから」
「何言ってんだ。いいわけねぇだろ」
「いいの。帰ったって……」
その先に何が続くのか、言わなくてもキースにはわかったのだろう。そのまま返す言葉もなく、口を噤む。
私は立ち上がり、アルゼに向かって深々と頭を下げた。
「アルゼさん、色々と考えて下さってありがとうございます。でも、私のことは気にしないで下さい。こっちだろうが向こうだろうが、私には何の違いもないんです」
そう、変わらないのだ。
鏡吾がいないという事実は。
「むしろこっちの方が、気が楽なんです」
鏡吾と過ごした場所。鏡吾と歩いた道。鏡吾と目指した、夢。
この世界には、そんな思い出の欠片がないから、いっそ楽だった。だったら、この世界に留まっている方が、まだマシだ。
じゃあ、と短く付け加えると、私は扉に真っ直ぐ向かっていく。
「サクヤ！」
すぐにキースが私の後に続いてくるけれど、私は振り向かずにドアノブを握った。
「キース、助けてくれてありがとう。でも、もう私のことは放っておいていいから」
「はいそうですかって、素直に聞けるわけないだろう」
「いいからほっといて！」
伸ばされた手をするりとかわして、私は勢いよく廊下に飛び出し

た。
城内の構造なんてわからないから、ただ闇雲に走り抜ける。
運がいいのか、足を運ぶ先には人影もなく、行く手を阻まれることも咎めだてられる事もなかった。とは言っても、キースに追い付かれるのも時間の問題だろう。
そう思った途端、前方にキースと同じような服を着た男の姿が見えた。これでは間違いなく捕まってしまう。
目についたのは開け放たれた窓だった。格子は入っていない。
考える間もなく、桟に手をかけ、その身を宙に踊らせた。
「サクヤ！」
焦ったような、驚いたようなキースの声を聞きながら、窓の側に植えられていた木の枝でワンクッション置いて着地の衝撃を和らげる。が、そこまでは上手くいったけれど、降りた先に人がいたのは計算外だった。
飛び降りてきた私を見て、そこにいた人物はあからさまに不審そうな視線を向けてきた。
仕方ない。どう見ても私は不審人物だから。
「何だ、貴様は」
切り裂くような鋭く冷たい瞳と声音。圧倒的な存在感を放つその男に、私は声もなく立ち尽くしていた。
「……誰を前にしていると思っている。礼を取ることすらできんのか？」
苛立った様子で男は吐き捨てると、次の瞬間白銀の輝きが目の前に現れた。それは、ピタリと私の喉の辺りで静止する。
私の息も、止まった。
「黙っていないで何とか言ったらどうだ」
こちらが恐怖で固まっているのをわかっていて、馬鹿にするように男が嗤う。
男の態度が腹立たしくはあるけれど、それでも鋭い刃を突きつけられては、声を出せるはずがなかった。

「口がきけないわけでもあるまい。それとも、貴様の両親は話し方すら教えられないほど愚鈍なのか？」
鼻で嗤って見下した話し方に、思わずカチンときた。
私は自分の両親を尊敬しているし、誇りだと思っている。こんな見ず知らずの相手に、貶される覚えはなかった。
腹立たしさが、恐怖を押しのける。
「……こそ……」
「何だ？」
「そっちこそ何様のつもり！？　初対面の人間に対する口のきき方ってモンを知らないんじゃない！？」
完璧に、自分のことは棚上げだ。
けれど、こういう俺様な男ははっきり言って嫌いだ。人を見下すことに慣れている人間なんて、ロクなやつじゃないに決まっている。
「ほう……、この俺にそんな口をきくとはな」
片頬を引きつらせるように口角を上げる男。その瞳に、背筋を凍りつかせるような残忍な光が宿る。
男の柄を握る手に力が籠められ、僅かに動いた切っ先が私の皮膚に触れるか触れないかのギリギリの位置まで近付いた。
「お待ち下さい！」
このまま刺し殺されるのかと思った瞬間、制止を望む声と駆け寄ってくる足音が聞こえた。キースが私を追って来たのだ。
「キース、こいつはおまえのオンナか？　どういう素性か知らんが、育ちが知れるな」
「申し訳ございません！　この者は、先程巡回の際に襲われていたところを助けたのです。今は少しばかり取り乱しているだけですので、どうかご容赦を……！」
キースが私と偉そうな男の間に割って入り、跪いて許しを請う。
それを見つめる男の表情は、剣は下ろしたものの冷たいまま変わらなかった。
それをどこか他人事のように眺めながら、

『夢から醒めるにはね』

ふと、脳裏に浮かんだのは、かつて出演した芝居の台詞。
私の台詞じゃないし、それほど思い入れの強い作品でもなかったはずなのに、本当に、ふと。

『その夢の中で、……ばいいんだよ』

跪くキースの肩に、そっと手を置く。
「サクヤ？」
「顔上げてよ。キースが謝る必要なんてないんだから」
「ならば、貴様自身が詫びを入れるというわけか」
にやりと、男が口元だけで嗤う。妙に冷めていた私はそこに先ほどまでの恐怖は感じなかった。真正面から長身の男を見上げ、キッと睨みつける。
「謝罪なんてしないわ」
「何だと？」
「サクヤ！　何を……！」
「キースは黙ってて」
慌てて私を抑えようとするキースを、一言で制した。私の気迫に圧されたのか、キースは声を失くす。
「私に非があるのならば、好きに処分なさればよいでしょう」
それまでとうって変わって、わざと慇懃な口調でそう言うと、男は驚いたように目を見開いた。
背後では、キースが息を呑む気配が伝わってくる。
「そう、たとえば、その剣で切り捨てるとか」
私の口元に、仄かな微笑が浮かんだ。
自ずと、自嘲に染まった笑みが。

『夢から醒めるにはね』
誰の台詞だったかも、今は思い出せない。
どうして思い出したのかも、わからない。
『その夢の中で』
ただ、それが今の私にとっての、『鍵』のような気がした。
『死ねばいいんだよ』
悪夢の世界から抜け出す扉を、開ける為の。
「サクヤ！　何を馬鹿なことを！」
「だから、キースうるさいってば」
「うるさいって、おまえ、さっきも――！」
窘めるキースと、全く取り合わない私の不毛な言い争いが始まる。
すると、男はさも可笑しげに喉を鳴らして笑い出した。
私もキースも訝しみ、眉を顰めるのも意に介さない様子で、男は手にした刃を鞘に収める。
「陛下？」
「面白い女だ。おい、キース」
「はっ！」
「聖廟前に立ち入ったことは不問にする。それから……」
男の視線がキースから私へと移った。
「コイツはおまえが守ってやれ」
男が突然言い放った言葉の意味が、瞬時に判断できない。
何がどうなってそういう台詞を生み出されたのかわからず、呆然としている私に男はふんと鼻で嗤った。
「サクヤといったか。せいぜい長生きしてみせろ」
「なっ……！？」

男の言葉と視線で、わかった。
この男には、わかってしまったと。
苛立ちを覚えた私をよそに、男は蔑むような笑みを残して踵を返した。
目の前から遠ざかってゆく後ろ姿を見つめたまま、行き場のない怒りが呟きとなって零れる。
「あの男、サイテー」
「お、おい、サクヤ！」
心底腹が立ち、悔しさに身が震える。窘めるキースの声も、耳に入らなかった。
男には、わかってしまった。私が、『死』を望んでいることを。
だから斬らなかった。
だから、「長生きしてみせろ」などと皮肉ったのだ。
「何考えてるんだよ、おまえは！」
しっかりしろと言わんばかりに、キースが私の両肩を掴み揺さぶる。
それでも、落ちていくばかりの私の気持ちは、一向に前向きになんてならなかった。
「キースに迷惑をかけるつもりはないよ」
「そうじゃなくて……ああっ、もう！　何でそんなに――」
「私のことなんてほっとけばいいじゃない。どうせ関係ない人間なんだから」
そこまでキースが必死になる必要なんてないのに。たまたま助けただけの、しかも異世界の人間なんかに。
そこまで言葉にはしなくても、私の投げ捨てるような態度から、キースには伝わってしまったらしい。ムッとした表情になり、明らかに怒っているのがわかった。
キースがどれほど博愛精神に溢れていても、さすがに見放されるだろう。
そう思っていたら、

「じゃあ、言うけどな。関係あるヤツはどうするんだ？」
「関係、ある人？」
思ってもみない、言葉だった。
「家族とか、兄弟とか！　おまえは『キョウゴ』ってヤツのことばかり考えてるけど、おまえの周りにはおまえを大切に思ってるヤツだっているんだろう！？」
「私、を……？」
言われて初めて、今まで微塵もそんなことを考えていなかった自分に気付いた。
確かに、私には大切な家族がいる。実の両親はもう他界しているけれど、育ててくれた叔父夫婦と、誰よりも自分に近い存在である双子の兄の藤夜。
家族だけじゃない。一緒に舞台を作り上げてきた劇団の仲間や、励ましや叱咤激励を与えてくれる友人たち。
鏡吾を失ってから、その誰もが私を支えてくれていた。けれど、私にはそれが見えずに、時には煩わしさを感じてさえいた。
それほど、自分しか見えていなかった。
「サクヤにとっても、大切なんじゃないのか？　その人たちは」
今度は優しく諭すように問うキースに、私は力なく頷いた。
「ごめん、なさい……」
消えそうなほど小さく零れた謝罪に、キースは私の髪をくしゃと撫でる。
「それは、あっちに帰ってからその人たちに言ってやれ」
「うん」
キースの穏やかな声に促され、初めてちゃんと思った。
『帰りたい』と。
帰って、『謝りたい』と。
そして、もう一つ。
「キース」
「何だ？」

「ありがとう」
今までの形だけのお礼じゃなく、初めて心からキースに感謝した。
進むべき道も、本当に大切なものも、何もかも見失っていた私を、正してくれたことに。
「バーカ。礼を言われるようなことなんてしてねぇよ」
キースは少し照れたように笑って、もう一度優しく頭を撫でてくれた。

こうして、私の新たな生活が始まった――。

Scene. 2　夢の宴　―　Burlesque　―［1］

結局、キースとアルゼの勧めるままに、私はキースの家でお世話になることになった。
キースが結構なお偉いさんかもしれないと思ったから、どんな豪邸に連れて行かれるのかと思ったけれど、思ったほど大きくもなく、お手伝いさんや使用人が沢山いて「お帰りなさいませ、ご主人様」とかって出迎えられるわけでもなく、それは少しほっとした。
どうやらキースは一人暮らしらしい。部屋も余っているとのことなので使っていない客室を使わせてもらうことになった。
そうしてキースの家で生活を始めて三日。
キースには仕事があるから、ずっと一緒にいるわけじゃないけれど、朝食や仕事を終えて帰ってきた夜には、この世界のことを少しずつ教えてくれた。
国の簡単な地理、風俗や習慣など、まずは生活に必要と思われる知識を中心に。
そして、この間宮城で私が会った男についても、だ。
あの男の正体を聞いた時、あれだけエラそうな理由がよくわかった。
男の名前は、シヴァ・ティファレト。
このベルティリア帝国の、若き『聖帝陛下』だという。
エライもエライ、この国で一番エライ人だった。
「まったく、あの時は心臓が止まるかと思ったよ」
「ごめんって」
シヴァの話をしながら、キースは深い深い溜め息をついた。私はそれにひたすら謝るしかできなかった。
知らなかったとはいえ、シヴァは最高権力者で、私の行為は反逆罪にあたるという。
それに加えて、あの場所は一部の者しか立ち入ることが許されて

いない『聖廟』の前庭で、許可なき者は死罪に値するらしい。
殺せばいいとか言っていたけれど、本当に殺されて当然の状況だったわけだ。
それだけじゃない。私がキースに庇護されている身だということで、キースまで危うくなるところだった。
シヴァが気まぐれで許してくれたから良かったものの、そうでなかったらキースに申し訳がないどころの話ではない。
「ホントにごめん。知らなかったじゃ済まされないよね」
「もういいから気にすんな。結局俺達は二人とも無事だったわけだし」
謝っても謝り切れず、さすがに落ち込んだ私に、キースは頭を撫でながら優しい笑みをくれる。
どこまでも優しいキースに救われる思いで、私はただ頷いたのだった。

「舞踏会？」
「ああ」
それは仕事から帰ってきたキースが、私が作った夕食を食べながら切り出した話だった。
話の内容は、例の性格極悪聖帝陛下には美しい妹姫がいるらしく、そのお姫様の誕生日を祝う舞踏会が近々開かれるらしい。
キースは、それに出席しないかと言ってきたのだ。この私に。
「家に閉じ籠ってるよりも、気晴らしになるだろ？」
「うーん」
キース曰く、騎士団員は全員出席かつ同伴者必須だそうだ。
それはそういうものなのだから仕方ないだろう。けれど、
「ねえ、キース」
「何だ？」

「そういうのって、恋人とか誘ってあげればいいんじゃないの？」
まず、真っ先に思った疑問だった。
キースの顔は整っている部類に入ると思う。劇団員全員から太鼓判を押されるほどの面食いの私が言うんだから間違いはない。
若くて――私よりは年上だろうけど――、美形で、その上騎士としての立場も上の方の人っぽいんだから、恋人がいて当たり前な気がした。
けれど、私の予想に反して、キースは面食らったような表情をしている。それから二、三回まばたきを繰り返した。
「何言ってんだ？　俺に恋人なんかいるわけねぇだろ」
「そうなの？」
「いたら、おまえをここに住ませてんの、問題だろうが」
キースの言い分に納得はしたけれど、それにしたってキースなら引く手数多だと思う。
まさか、相手を選ぶのが面倒くさいから、手近なところで手を打とうとしているのかと思いそう言うと、思いっきり呆れた顔をされてしまった。
「そんな顔しなくてもいいじゃない。キースならいくらでも寄ってくるだろうなーって思っただけなんだから」
「寄ってくる女なんて、ロクなのいねぇよ」
ポツリと漏らした言葉は、珍しくウンザリしきった、吐き捨てるような口調。
まだそんなに付き合いが長いわけじゃないけれど、キースらしくないと思えるものだった。
「キース？」
「あ、もしかしておまえ、踊れないとか？」
一瞬で、先ほどの違和感が掻き消される。目の前のキースには、いつも通りの笑顔があった。
「えーっと、踊れないことはないんだけど」
ほんの一瞬だけの違和感に戸惑いながらも、そう答える。

ついさっきの、別人のような印象は気の所為だったのだろうか？
「踊るのは好きだし」
話を続けながらキースの様子を窺うけれど、それからは微塵もおかしな感じはない。
結局私の思い過ごしだったのだろう。
「じゃあ問題ないな」
「え？　いや、その」
「早速明日には仕立て屋呼んでドレス仕立てないと。それから靴に宝飾品もいるか」
私が意見する間もなく、キース一人で段取りを組んでいく。
呆然とそれを聞いていたけれど、我に返って慌ててキースを止めた。
「ちょっと待ってって！　キースにそんな負担掛けさせるわけにはいかないでしょ！」
「心配すんな。俺、こう見えても稼いでる方だから」
「それは色々見てれば何となくわかるけど！」
豪邸ではないけれど、キースの家の作りや調度品なんかはどう見ても高級そうだった。
派手さはないものの、繊細な彫刻が施されていたり、さりげなく金や銀があしらわれていたり。
何より、キースは聖帝であるシヴァに名を覚えられているような人なのだ。
その他大勢のような存在でなく、確固たる地位にいなければそうはいかないだろう。
けれど、身分が高かろうが、稼いでいるお金が多かろうが、そんなことは関係ない。キースに甘えていい理由になんてなりはしないはず。
そう思っていたら、私の考えを見透かしたようにキースが苦笑した。
「だったら、給料とでも思っとけよ」

「給料？」
「そう。サクヤはこうやって飯の支度や片付けをしてくれてるし、部屋の掃除のしてくれてるだろう？」
「確かにしてるけど……」
それは昼間キースがいない時に暇だからと、さすがに何かしないと申し訳がないって言う理由があるからだ。給料をもらって働かせてもらっているというのとは、根本的に違う気がする。
「ちょうど少し前に通いのメイドが辞めたところだ。サクヤがいてくれるお陰で、新しく雇わなくて済んでるから俺も助かってる、ってのじゃ駄目か？」
「いや、まあ、駄目じゃないけど……」
けれど、メイドの給料として考えるとすると、明らかに働きが見合っていないんじゃないだろうか。そう言おうとしたけれど、キースが穏やかな笑みで私を見つめているから言えなくなった。
多分、言ったとしても上手く言いくるめられてしまいそうだ。
だったら、私のするべきことはただ一つ。
「じゃあ、これからもっと気合い入れて家事する！」
「いや、別に今でも充分……」
「いいの！　働かざるもの食うべからず！」
固く拳を握り締めてつき上げながら宣言すると、キースがプッと吹き出した。そのまま声を殺して笑い出す。
いや、そんなバカウケしなくてもいいと思うんだけど。
「おま……、おもしれぇ、な……」
「笑いすぎデス、キースさん」
「いや、だって、よ……」
ひとしきり笑った後、キースはやっと呼吸を整えて続けた。
それでも目の端に微かに涙が浮かんでいる。本当に笑いすぎだ、この人。
「いいとこのお嬢が、ポーズきめて『働かざるもの食うべからず！』って……」

そこまで言ってまた思い出したのか、キースは口元を押さえて笑い出す。
笑い続けるキースを見つめながら、私は不思議そうな顔をしていたことだろう。
そう。キースの発言がかなり疑問でたまらなかったのだ。
「何で、私がいいとこのお嬢だなんて思うの？」
私は家のことをまだほとんど話していない。キースに話したことは、初めて会った日に鏡吾のことを少し話したくらいだった。
なのに、キースはごく当たり前の確定事項のように私を『お嬢』だと言ったのだ。
すると、キースは迷うことなく私の問いに答える。
「踊るの好きとか言ってたし、あの聖廟前で陛下にケンカ売った時の口調とか立ち居振る舞いとかが完璧だったからさ」
「それ、だけ？」
「それだけで充分だろ。ある程度以上の家筋でなけりゃワルツも礼儀作法も習えない。日々の生活を送るのに精一杯な家庭なら、そんなものに割いてる時間はないからな」
些細なところに気づいているキースの洞察力に、失礼だけど意外に思ってしまった。
もしかしたら、キースはものすごく優秀な騎士なのかもしれない。
ただ一つ、間違っていることがある。
この世界ではキースの言うとおり、家柄の良し悪しが関係するのだろう。
けれど、私がワルツを踊れたり、それなりの立ち居振る舞いができたりするのは家柄の所為じゃない。
「全部、舞台の為だったから……」
「え？」
「ううん、何でもない。ごちそうさまでした。後片付け、するね」
誤魔化しながら立ち上がって、使った食器を運び始める。洗い場で一人になると、ぼんやりと『夢』の為に必死だった自分を思い出

した。

物書きだった父と、ピアノを教えていた母。

二人の影響なのか、昔から物語も音楽も大好きだった。

そして、舞台に興味を持ち始めたのは、中学の時。物語も音楽も大好きな私が、演劇の世界にのめり込むのに、時間はそうかからなかった。

本気で役者としての道を目指したいと告げると、両親は惜しみなく援助をしてくれた。この点では、確かに私は『お嬢』なのかもしれない。

ピアノは母に教わった。声楽やバレエなど、母の大学時代の友人なんかのツテがあったのも大きかったと思う。

その他、ボイストレーニングも受けたし、ダンスも色々と習った。

すべてが、舞台に立つ為だった。スポットライトの中心に立つ為の努力だった。

レッスンがきつくても、それが自分の芝居の糧になると信じて努力し続けた。

そんな努力の甲斐あって、私は主役を勝ち取ることができたのだ。

(でも、もうそんな努力も要らないんだ)

気付かぬうちに、小さな溜め息が零れる。

もう、私が舞台に立つことはない。それは自分自身で決めたことだ。

それに、この世界にいる限り、芝居など縁がないだろう。それこそ、キースに連れられて舞踏会でも行かない限り、私の今まで習得してきたものは何の役にも立たない。

そう思うと少し空しいような、どこか滑稽なような気分になった。

(最後に踊ったのって、いつだったっけ?)

複雑な気持ちを抱えながら記憶を辿る。

そして、

「あ……」

反射的に零れ落ちた声をとどめる為に、両手で口を覆った。
感情と声を抑えつけ、洗い場を離れる。ダイニングにはまだキースがいて、何かはわからない書面とにらめっこをしていた。
「キース」
「ん？　どうした？」
押し殺した私の声音に、キースが顔を上げる。反対に私はキースの顔をちゃんと見られなくて、視線を足元に落とした。
「ごめん。やっぱり、舞踏会ムリ」
「サクヤ？」
「ごめんね」
もう一度だけ謝罪の言葉を繰り返し、私はダイニングを抜けて寝室代わりの客室へと駆け込む。怪訝さと心配の混じった声が追いかけてきたけれど、何も答えられなかった。
「……踊れ、ないよ」
零れ落ちる呟きとともに、零れ落ちる、一雫。
閉じたドアにもたれかかり、私はゆっくりと瞳を閉じる。
まなじりから、また涙が滑るように頬を撫でていく。それと同じくして、ずるずるとドアに背を預けたまましゃがみ込んだ。
「あれが最後なんて、思わなかったもんな」
脳裏に甦るのは、楽しくてしかたがなかった、夢のようなヒトトキ――。

私が奈落へと転落した舞台の、更に一つ前の公演。その舞台は、ダンスがふんだんに盛り込まれた内容の芝居だった。
私は名もないダンサーの役で、台詞はほとんどないけれど、その代わりにメインの役者たちと代わる代わる踊るのが見せ場。
けれど、メインキャストを演じていた鏡吾とは、一度も踊るシーンはなかったのだ。

舞台は無事に千秋楽を迎え、打ち上げは行きつけのお店を貸し切ってのドンチャン騒ぎだった。誰もが上機嫌で大盛り上がりのさなか、音響を担当していたスタッフが、不意にＢＧＭを芝居で使っていたＣＤに切り替えた。

みんなのテンションはより一層高まり、ダンスシーンの曲ともなると、誰が言い出したわけでもなく手に手を取って踊り始めた。

私の目の前にも、先輩の一人の手が差し出され、笑ってその手を取ろうとした瞬間、後ろから抱きすくめられた。

「ダーメ。サクヤは俺専属」

「きょ、鏡吾！？」

私を捕まえて、悪戯っぽく笑う鏡吾。差し出したまま行き場を失ってしまった先輩の手は、そのまま鏡吾の額を小突いた。

「この独占欲のカタマリめ！」

「まーた始まったよ、鏡吾のサクちゃん独り占めが」

あちらこちらから上がる呆れ混じりの苦笑。けれど、その中にも仲間たちの優しさが見える。

誰もが、私と鏡吾の仲を祝福してくれていて、いつも見守ってくれていた。

もちろん、それは鏡吾の人望のなせる業だった。誰からも好かれ、誰からも信頼される鏡吾。だから、

「うるさい。おまえら俺のサクヤにさんざん触りまくったんだから、もういいだろっ」

こんなわがままな台詞を吐いても、みんな笑うばかりだった。

「触りまくったって、やらしい言い方しないでよ」

「え？　何だ？　誰かにセクハラされたのか？　あ、屋鋪、おまえだろ！」

「するか！　んなことしたら、おまえ『オペラ座の怪人』ばりに俺を抹殺するだろ」

「安心しろ。一応大事な仲間だからな。苦しまない方法でやってやる」

「安心できるか！」
こんな漫才のようなやりとりもよくある光景で、みんながお腹を抱えて笑っていた。私も鏡吾の腕の中で腹筋が痛くなるくらいに笑った。
音楽が、クライマックスのワルツへと切り替わる。
鏡吾は優しい笑みを一度向けると、そっと腕を解き、優雅な仕草で私の手を取った。
目線だけの合図。
軽やかに、流れるようにステップを踏み出す。三拍子の緩やかな旋律に合わせて。
本番では一度もパートナーを務めていなくても、私たちの息はぴったりだった。ダンスメインの私の練習に、鏡吾はよく付き合ってくれていたからだ。
だからアドリブでステップやターンを入れられても何の問題もなく、ただただ鏡吾と踊ることが楽しかった。
「今度、コレ再演することになったら」
踊りながら、鏡吾が周りに聞こえないように小さく囁いた。
「サクヤはダンサー以外の役な？」
「何で？」
「今回かなり我慢したから。次はもう無理」
少し拗ねた表情の鏡吾に、自然と笑みが浮かぶ。
舞台に立っている時は本当に堂々としていて、どの役者にも負けないくらい頼りになるし存在感もあるのに、時々こんな風な子供っぽいところを私には見せてくれる。
それが何物にも代えられない喜びだった。
「大丈夫。私はずっと、鏡吾の専属パートナーだから」
嬉しさを噛み締めながらそう告げると、鏡吾はまた優しく微笑んでくれた。
そう、ずっと鏡吾だけのパートナーであり続ける、はずだった。

もう、あの大好きな綺麗な手が、この手を取ってくれることはない。
もう、あの優しさに満ちた手が、私の前に差し伸べられることはない。
パートナーを失った私は、二度と踊ることができないだろう。

翌朝、キースと顔を合わせるのが、やっぱり気まずかった。
理由も何も言わずに、舞踏会は無理だとだけ言い捨てて逃げ出した私に、キースが何も思わないわけがないだろう。
逃げてばかりの自分に零れる溜め息。キッチンで朝食の準備しながら、自分自身に嫌気がさしていた。
いつからこんなにも私は弱くなったのだろう。前はもっと、何にでも前向きに立ち向かって行けたのに。
自分自身に問い掛けながらも、本当は理由なんて知れていた。
鏡吾がいないから、だ。
憧れて、尊敬して、彼と歩いていけることを誇りにすら思っていた。
鏡吾に見合う人間になりたかったから、そしてそんな私の想いを理解し、支えてくれる鏡吾がいたからこそ、私はどんな困難なことにでも挑戦していけたのだ。
目標であり、支えでもある鏡吾のいない今、私にできることがどれほどあるのだろうか。
「おい、サクヤ」
「は、はいっ！？」
物思いに耽ったまま包丁を握っていた私の背後に、いつの間にかキースが立っていた。慌てて包丁を置き、笑顔を作って振り返る。
「お、おはよう、キース！」
「ああ、おはようはいいけどよ」

キースの表情がすごく微妙だ。
呆れているというか、心配しているというか、不審そうというか。
「……どうしたの？」
「いくら何でも、それは多過ぎないか？」
「へ？」
何のことかと思いつつ、キースの視線の先を辿っていくと、そこにはまな板。そして、キャベツの千切りが山盛りに積まれていた。
付け合わせとして切っていたはずが、すでにその域をはるかに超えている。むしろ主菜の勢いだ。
「あ、えっと、ね。お野菜は身体にいい、よね？」
「あのな……」
明らかに無理やりな誤魔化しに、キースは呆れ顔とともに溜め息をついた。私が考え事に没頭していたのはバレバレだろう。
「お昼に頑張って食べるから」
「でも、結構な量だぞ？」
「大丈夫。お野菜好きだし、サラダにしたら結構食べれるもんだよ」
「そうか？　ならいいんだが」
とにかく飯食おうぜと、キースはダイニングに向かう。
いつもと全く変わらない様子のキースに、私はほっと息をついた。けれど、キースはわかっていて『いつも通り』に振る舞ってくれている気がする。
まだほんの二、三日しか一緒にいないけれど、キースはそういう気遣いができる人なんだと感じたからだ。
キースに感謝をしつつ、私は大急ぎで朝食の準備を整え、遅れてダイニングへと向かった。

二人で食べる朝食も、今日で三回目。まだ慣れない感覚ではあったけれど、なかなか楽しいものだった。
いつも食事をしながら、キースは様々なことを話して聞かせてくれる。ベルティリアについては勿論、それ以外にも仕事中にあった

出来事とか、すごく下らない世間話とか、実に様々な話題を提供してくれて、どの話も新鮮で面白かった。
いや、本当は話の中身どうこうというより、誰かとこうしてお喋りしながら食事をとるということを、しばらくしていなかったからかもしれない。
以前はどんなに忙しくても、週に一度は家族全員が食卓に揃うようにしていた。
けれど、鏡吾を亡くした後は、外で一人済ませてしまうことがほとんどだった。心配してくれる叔父夫婦や藤夜の顔を見たくはなかったから。
「……のか？」
「え？　何？」
またも考え込んでいた私は、キースの質問に対して完全に上の空だった。
訊き返すしかない私に、キースは渋い表情をするでもなく、ただ仕方ないなとでも言わんばかりの苦笑で同じ言葉を繰り返す。
「だから、そろそろ食材がないんじゃないかって訊いたんだ。前にマミヤが買い出しに行ってくれたのはサクヤが来る前日だったし」
「マミヤ？」
知らない名前に首を傾げる。
もしかしたら、前に雇っていた通いのメイドさんのことだろうか？　その割には親しげな雰囲気を醸し出しているから、違和感を覚える。
「俺を育ててくれた母親みたいな人だよ。前のメイドが辞めてから、たまに様子見に来てくれてたんだ」
ああ、なるほどと納得すると同時に、今更ながらの疑問が浮かび上がってきた。
どうしてキースは一人暮らしをしているんだろう、と。
結婚はしていない。恋人もいないらしい。前者は一目瞭然で、後者は本人が直接言っていた。

では、家族はどうなんだろう？
マミヤという人が母親代わりということは、本当のお母さんはもう亡くなっているかもしれない。
けれど、父親は？　兄弟とかもいないの？
一人で暮らすには、この家はあまりにも広すぎるんじゃない？
次々に質問が浮かんできたけれど、言葉にすることはできなかった。
もしかしたら、キースが今までに亡くしてきた人たちの中に、家族も含まれているのかも知れないから。
「そうだな……、昼過ぎにマミヤにこっちに来るように言っておくから、一緒に市場まで行ってこいよ。サクヤも家の中に閉じ籠りきりだと飽きるだろ」
「別にやることはあるんだし、飽きはしないけど……」
答える途中で気がついて、すぐさま「わかった。行ってくる」と言い直した。
一人でいると、どうしても私は余計なことを考え過ぎてしまう。言葉通りの意味だけじゃなく、キースはそれを回避する為に提案してくれたんだろう。その気遣いを無駄にすることはできなかった。
私の了承にキースは笑顔で応えると、ごちそうさまと手を合わせて席を立つ。私も続けて席を立ち、キースが宮城へと向かうのを見送った。

キースを送り出すと、朝食の後片付けと掃除、そして洗濯が待っている。
後片付けは大した量ではないし、そんなに手間はかからないけれど、掃除機も洗濯機もないこの世界では、あとの二つが大変だった。掃除は箒とちりとりと雑巾、洗濯は洗濯板と大きなタライ。これで割烹着とモンペがあれば、気分は昭和初期だ。こちらに来てから、本当に文明の利器の便利さを痛感した。
けれど、働くことは苦じゃないし、あまり経験しないことだから

新鮮で楽しくもあった。何より、身体を動かしている間は余計なことを考えなくて済む。
全部の作業を終える頃には、もうお昼時。
朝の大量キャベツをハムや卵と一緒にパンに挟んでサンドイッチにした。残ったキャベツには少し別の野菜を足して、ドレッシングで和えてサラダの出来上がり。
野菜だらけの昼食だけど、一人で食べる分には問題ない。
我ながら良い味だと自画自賛しながら平らげ、食後のお茶を味わっていると、鈴の音のようなものが耳に届いた。玄関の呼び鈴だ。
「はぁい」
応えながらそっとドアを開くと、そこには恰幅のよい、にこにこ笑顔のおばさんが一人立っていた。
年の頃は五、六十代だろうか？　白髪混じりのグレーの髪を後ろで一纏めにしてお団子にしていた。外国人の年齢ってわからないから当たっているかは不明だけど、そんなに外れてもないと思う。
暖炉の側でロッキングチェアに座って、編み物してたりするのが似合いそうとか思ってしまった。
「こんにちは。貴女がサクヤさんね？」
「はい。えっと、マミヤさん、ですか？」
「ええ、よろしくね」
目を細めて笑うマミヤは、ものすごく温かい感じがした。そして、その笑顔が少しだけ懐かしい人と似ている。
（叔母さんに、ちょっと似てる）
両親を中学の時に事故で亡くした私たち兄妹は、揃って叔父夫婦に引き取られた。
叔父夫婦には子供が出来なかったから、私たちは実の子供のように愛情を注いでもらったように思う。
特に叔母さんは娘が欲しかったらしく、私への可愛がり方は格別だった。
料理や裁縫も叔母さんから沢山教わったし、私にとっても実の母

と同じくらい『お母さん』だったのだ。
そんな叔母さんと雰囲気のよく似たマミヤとは、何となくすぐに仲良くなれそうな気がした。
「こちらこそ、よろしくお願いします」
ペコリと頭を下げると、マミヤは笑顔のままで「はい、よろしく」と繰り返す。どうやら、悪い印象は与えなかったようでホッとした。
「あ、とりあえずお茶でも」
「あらあら、そんなに気を遣わなくてもいいのよ？」
「えーっと、じゃあ、さっさとお買い物を済ませちゃって、その後ゆっくりお茶しましょう！」
私の提案に、マミヤは一瞬面食らったような表情になり、それからクスクスと笑い出した。キースにもよく笑われるし、私の発想ってこっちの人からしたら変わってるんだろうか？
「私、何か変なこと言いました？」
「いえいえ。元気の良いお嬢さんね。キース坊ちゃんが気に入られるのも納得ですよ」
「ぼ、坊ちゃんって……」
やっぱりと言おうか、でもらしくないと言おうか、キースは良いとこのボンボンだったらしい。
『坊ちゃん』と呼ばれる姿を想像すると、笑ってしまいそうになるけれど、それがキースの顔の一つであることは確かだ。
「じゃあ、ちゃっちゃと済ませて、お茶しましょうね。サクヤさんとお話しするの、とっても楽しそうだわ」
マミヤが建前でなく本当に楽しそうに同意してくれるから、嬉しくなった。
せっかくだし、キースには直接訊きづらいことなんかもちょっと訊ければいいなと思いながら、私たちは市場へと向かったのだった。
市場は、押し寄せるような活気と人だかりで溢れていた。
スーパーやコンビニに慣れているから、その雰囲気に多少圧倒さ

れる。
いや、確かに大きなスーパーだとかデパートの食料品売り場もすごいんだけど。
でも、桁が違う。人も、売られている品物も、全部。
肉、魚、野菜に果物。日用雑貨や衣料品、武器や防具に至るまで、様々なお店が露店みたいな感じで軒を連ねていた。
牛や豚や鶏なんかは、生きたまま囲いの中に繋がれている。さすがに魚はさばけても鶏や豚はないから焦ってしまった。さばく以前に生きているものをしめることもできそうにない。そんな私の心情に気付いたのか、マミヤが安心してと言わんばかりに微笑んだ。
「大丈夫よ。お肉は必要な分だけお店の人が切り分けて売ってくれるから」
「そ、そうです、よね」
恥ずかしさを笑って誤魔化すしかできなかった。確かに、家族の少ない家なら鶏一羽でも結構な量になるのだ。冷蔵庫もないのに、日持ちのしないものを大量に買うわけがなかった。
「キースぼっちゃんは、お肉よりもお魚が好きなのよ」
「へえ、意外ですね。体力使うお仕事だろうから、お肉の方が好きかと思ってました」
「好き嫌いは少ないから、何でも食べてくれますけどね。ああ、でも、どうしても食べられないものが一つだけあるの」
「そうなんですか？　何が駄目なんです？」
そういえば、キースが食べ残しているのは見たことがなかった。つまり、決定的に無理なものは、まだ食卓に上がってないということだろう。キースがこっそり隠して捨ててなければの話だけど、そんなおかしな素振りは見てないと思う。
ふふっと、可笑しさを噛み潰したような表情のマミヤが、一つの露店を指差した。
そこは乾物を扱っているようで、干した野菜類や海藻類が並べられている。その軒下には薄茶色の四角い物体が、藁のようなもので

できた細長い縄でいくつも連ねられ、吊るされていた。
マミヤの示した先は、まさにその吊るされた物体だった。
「あれって……」
私が見知っているもので一番近いのは、高野豆腐だった。お湯で戻す前の状態のものだ。
でも、ここは日本ではなく、ベルティリア。いかにも西洋風なこの国に、思いっきり和風な食材があるとは思えなかった。
「あら、知らない？　高野豆腐よ」
あるの！？　とツッコみたくなったけど、心の中だけにとどめておこう。
考えてみれば、他の野菜だって日本にあるものだったし、調味料も見知ったものがほとんどだ。今市場を見回してみても、時折どう扱えばいいのかわからない調味料や食材はあるものの、ごく一部にすぎなかった。もしかしたら、食文化は意外に似ているのかもしれない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1323ba/

夢のあとさき

2012年1月12日10時46分発行